

# Oh!Smile

2014年 9・10月号

## 民話 笑い話

### 民話に学ぶ!

民話とは、民衆のあいだに語り継がれた、長い間に多くの人々の口から耳へと語り伝えられた話です。その「民話」という言葉は戦後になってから使われ始め、昭和50年代には数々の書籍が出版され、全国的に民話人気が高まりました。民話のなかには、日本各地で同じような内容で語られている話が多く存在します。それは人々の営みやものの考え方・感じ方に多く共通する部分があるためであり、民話の生まれる土台があったからです。

民話によく登場する正直爺さんと、悪知恵がはたらく隣の爺さんの話は一般的です。正直であるということは昔から長く尊重されました。「正直の頭(こうべ)に神宿る」という言葉があるように、正直者が神仏のご加護を受けて難局を乗り越えたり、幸運が重なり、正直爺さんは必ず幸福を手に入れました。正直者の値打ち自体を決して損なっておりません。一方、「嘘も方便」という言葉があります。本来は好ましくないはずの嘘が事態を好転させたり、悪化防止につながる知恵を働かせます。相手の立場や周囲の状況など見極めながらの配慮や気配りは救いの手としてのニュアンスの話も多々あります。

また、自分の低い者が高い者をやりこめたり、おどけ者になって笑いをさそったりして知恵の勝利を語った民話もあります。ともに笑える者は仲間であり、笑いがあるから仲間意識が生まれくる、「笑う門に福きたる」につながっています。民話は過去の遺産ではなく、現在においても新しく生まれています。



### 正直者の話

#### ○ 「正直の人」の評価

たとえ罪を犯した者であっても、物事の「道理」をわきまえて「正直」な心で己の過失を明らかにし、反省して自重する者は許される。それを自分の落ち度だとさえ思わず、嘘をついて間違っていないかのようには偽るのは非常に罪深い。

「沙石集(しやしきしゅう)」

#### ○ 「阿呆正直」

あるところに、愚かで「正直」な人がいた。さて友人がいうには、お前は寝てばかりいて家業の商売さえも手伝わぬまま無駄飯ばかりを食っている。いずれ飢え死にしてしまふのは目にみえていて笑止千万なことだから、何か向いている仕事をしたらどうか、と。ところがこの男は、いやいや昔から諺にも「果報は寝て待て」とか「天道は人を殺さず」といわれているから大丈夫だと相変わらず樂觀して、日々徒食に明け暮れていた。しかし、案の定、家計が逼迫してきて仕方なく家財道具を売り尽くし、食べるものまでなくなり、ついには目が回ってしまふほどの惨状になって急に、天が私を殺そうとしていると素つ頓狂な叫び声を上げたのだ。これぞまさに、自業自得というものである。

「にがわらひ」

#### ○ 「嫉妬の心なき人」

遠江国に暮らしていた夫婦が別れることになり、妻はもはや馬に乗って出発するばかりとなった。昔からの風習で、離別の際は妻の要望通りに家財道具など好きなものをもつて実家に帰ってよいとされていた。何でも遠慮なく持っていくなさいといわれた妻は、あなたほど大切な人はいないのに、それを捨てる段になって他に何がほしいことがあるでしょう、という歌を詠んで

微笑んだ。どこにも皮肉めいた言い方がなく、その姿を真にいとおしく思った夫は妻の立立を止めて元の鞆に戻り、末永く一緒に暮らしたのだ。

「沙石集」

#### ○ 「胸であずき」

かかがあるのに、山向こうの女にほれた男がいた。毎夜、こっそり家を出ては、明け方近くになって、家へ帰ってくる。男がもどると、かかはきまって、夫の好きなうであずきを用意して待っておる。それがまあ、ほかほかとええぐあいに煮えていた。

「火の気もなかとに、いつもよいあんばいに煮えとるとか」男は不思議でならない。それでもついつい、山向こうの女もよいの通って行った。ところがかかは、ふきげんな顔ひとつせんだころか、あいそうよく迎える。「ととさん、腹が減っております。はよう、あずきを食ってください」とすすめる。それが毎晩続くもんで、いよいよ不審に思い、「こら、おかしかどね。よし今夜は、どうやってあずきを煮とるの

か見届けてやるう」その夜は女のところへ行くふりをして外へ出ると、そろっともどつて中の様子をうかがった。そうとは知らんかかは、男を見送ると、せつないやら悔しいやら胸が火のように燃えた。いつものようにひとり寝ると、茶わんにあずきを入れ、それを胸に乗せて、「七里松山 五里坂どころ 上の空では 通われぬ わしの胸のうちは 焦がれて燃える 煙を出さねば 人は知らぬ」と歌ったそう。それを聞いた男は、はじめてかかの寂しい胸のうちを知った。「おいが家をあげ、七里もある松山の女に通うもんで、かかはあげんして胸の火であずきを煮ていたのか」それっきり男は、二度と女のところへは通わなんだそう。

「九州地方の昔話」

# 笑い話

## ○ 土佐のいっすやう

「土佐のいっすやう」といいますと、強情っぱり、負けずぎらい、そのような意味です。

田辺島（たなべじま）というところに、しゃも好きな銀さんという男がおった。

二羽も三羽もしゃもを飼って、よそのしゃもと、け合わすのを楽しみにしておった。ひと朝のこと、銀さんは蒸し手ぬぐいでしゃもの羽をふいていた。つやを出すためである。ところが、どうしたはずみか、一羽のしゃもが、とがったくちばしで銀さんのおでこをごちんとつついた。銀さんは怒ったものの、「おぬしゃ、おらとやる気か」といって、しゃもの頭にかみついたと。

この銀さん、またあるとき、買ったての上等な桐下駄をはいて出かけたそう。ところが門のしきいをまたぐ拍子に、片一方の下駄が脱げて、ころげ落ちた。すると銀さん、もう片方もほうり出し、「好いたようにせい。主人について来んような下駄は、もういらんわい」そういい捨てると、はだしでさっさと出かけた。

## ○ 女房の出口

夫婦喧嘩のあげく女房を離縁した。女房は仕度をととのえ、ふだんしなかつた化粧をして亭主の前に手をつかえ、「ながながお世話になりました」と、玄関から出て行くこととした。「去られた女房が玄関から出ていく奴があるか」と亭主がいうので、ではと勝手口へまわると、「近所へ知れるとみっともない。そこから出るな」という。それでは庭からといったら、「そこは犬が入りするとところだ」「じゃ、出るどころがありません」「出るところがなければ、ここにいろ」

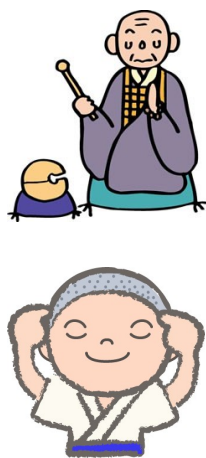
## ○ 彦市の話

彦市はのみ食いの寄合いを一度も欠かしたことがないが、材料や銭を出したこともない。いつもただ食い。みんなが彦市を避けても、かぎつけてどこへでもやってくる。ついに人里離れた山家で寄合いを開くことにして、戸をかたく閉め、さすがの彦市もここまではやってこまい、といっている。誰かが戸をたたいて、「こぼれるから開けてくれ」という。彦市らしい。こぼれるというから酒でもつこうしてきたのか。戸を開けて入れてやったが、彦一は何ももっていない。「こぼれるといつたのは、何だ」と聞いたら、「うまそうな臭いでよだれがこぼれる、といったんだ」

## ○ 和尚と小僧

和尚と小僧二人きりの貧乏な山寺で、布団がなく藁（わら）の中で寝る。ある朝檀家が来たので、和尚は急いで着替えをして迎えに出た。小僧がお茶をもって出て、ふと和尚の耳をみると藁くずがついているので、「和尚さん、耳に布団がぶら下がっています」といった。

もうひとつお話しを。和尚が秘蔵の飴を、留守中小僧になめられまいと、あれは毒だぞといっておいて外出した。こんな嘘でごまかされる小僧ではない。留守を幸い一口なめたらやめられず、とうとうみななめてしまった。どうするか。思案のあげく、和尚秘蔵の茶碗をわざと割って、泣いているところへ和尚が帰ってきた。「どうしたのじゃ」と聞かれ、「秘蔵のお茶碗を割った申し訳なさに、死ぬうと思つて毒をみな食べましたが、まだ死ねません」とまた泣いた。



さらに。

和尚さんは毎夜毎夜八平のかかのところへ行って、少しも寺に落ち着かない。小僧は業がわいてしかたがないので、ある日のこと、和尚さんが八平のかかほど大切にしている屏風（びょうぶ）に「二三四五六七八九十と墨黒々と書きつけ、最後にからかさ一本、書き添えておいた。和尚さんが帰るとこのありさま。おこつたおこらないの、「小僧！わしの大切にしている屏風になんということをした」と湯気立ててどなりつけた。すると小僧は平気な顔で、「そんなにおこらんで、まあ判じてごらんなんしょ」という。和尚さんはますます腹をたてて、「このばかめ、一三三四五六、これがいつたいなんのことだ」

「それではわしが判じてみます。ひとり知れりやふたり知り、三人にいい、四書五経を読む人が六道の道に迷うて七難を受け、八平のかかを盗んで九勞する。この寺の十持（じゅうじ）はからかさ一本で飛んでいかねばなるまい」小僧にいわれて、和尚さんは一言もなく、小僧小僧、降参したわと謝つたそう。

## ○ 思い違い

気のいい婆さんにふたりの娘がいた。上の娘は傘屋に、下の娘は雪駄（せつた）屋に嫁入りした。ひとり残つた婆さんは晴れの日も雨の日も泣いて暮らしておった。ある日のこと、隣の爺さんが遊びに来て、「婆さんや、なんでいつまでも泣いているのや」とすると婆さんは涙をふきふき、「そやかてあんた、晴れの日は傘屋は傘が売れんし、雨の日は雪駄屋は雪駄が売れんせんのや。娘たちがかわいそうで、かわいそうでなりませんがな」爺さんはしばらくするとこつと笑つた。「婆さん、そら、あんたの思い違いや。雨の日は雪駄屋の雪駄が売れますや。雨の日は傘屋の傘が売れますや。そう思えば泣くことはない。雨の日も晴れの日も笑つて暮らすことになりませうい」

## 編集後記

もう30年くらい前、「日本昔ばなし」のテレビは記憶に鮮明です。「ぼうや、よいこだ寝んねしな」の歌、子供が竜に乗って笑っている画面からはじまり、物語では独特なゆくりした口調「・・・だったそうなあ」と、あつたかいテレビマンガでした。登場する良い人と悪い人、また人間だけでなく動物や妖怪など、人なつっこくて面白く描かれてました。

どこの国にも昔話はあるのでしょうが、悪いものにはバチがあつた後悔する様子は日本らしさがあります。私が小さい時には母が寝床で昔話、作り話を聞かせ、「それから！どうなった？」と、夢に入っていくのです。恐い話には身を縮めました。それをおもしろがって話をする母でした。そんな話から良いことや悪いこと、楽しさやおそろしさなど植えつけられたような気がします。

日本人の心はそのようにして育つたと思うのです。

(YASU)

## 浪速フード株式会社

〒570-0003

守口市大日町3-32-11

TEL 06-4252-7770

FAX 06-6904-2610

E-MAIL smile@naniwaf.co.jp

HP http://www.naniwaf.co.jp

※「Oh!smile」への、ご要望・お問合せは上記にご連絡ください。